

入庁後の自分を振り返って

北九州支部 北九州県土整備事務所 中尾恵子

入庁してから今までの生活は、本当にあつという間でした。4月1日に辞令の交付を受けたとき、いよいよ自分も、今日から社会人の一員になるのかと、受け取った辞令交付書からしばらく目を離せずにいることを今でも覚えています。

私は、土木の技術職の公務員として働いています。この仕事を志望した理由は、大学で学んだ専門性を活かすことができること、生まれ育った福岡県で、福岡県のために役立てる仕事であるところに、大きな魅力とやりがいを感じ、自分もその一員として働きたいと思ったからです。しかし正直なところ、一般的な公務員の仕事は理解していましたが、公務員として働く土木の技術職員がどのような仕事をしているのか、その役割は何なのか、わからない部分もあり、入庁が決まった時は、大きな不安を感じていました。入庁して半年が経ったいま、土木の技術職員としての仕事の役割と必要性を実感し、今後の自分の目標が定まったところです。

入庁後の自分を振り返り、実際に業務を行う中で、印象に残っていることがあります。まず、初めて担当した工事です。海岸線に並行して伸びる遊歩道等に、冬季風浪により溜まった海岸の砂を海開き前までに撤去するという工事です。その海岸は、幼いころにプールや海水浴で何度も訪れたことのある場所であり、私にとって思い出の場所でした。その場所において、管理者になって初めて、県の仕事と自分たちの生活の身近さやその役割を知りました。また、一利用者という立場から管理者という立場に変わって、再び関わることができるとは想像していませんでしたので、とても感動するものがありました。

2つ目は、先輩と一緒に、住民の方と立会を行った時のことです。住民の方に、「県の方ね。」「どうか対応をよろしくお願いします。」と声をかけられました。そのとき、住民の方から見ると、新規採用などということは関係なく、皆同じ県職員であるということに気づきました。私は心のどこかに、まだ新規採用職員だからという考えがあり、自分の仕事をどこか客観視していたことを反省し、それと同時に、自分が県職員であることを改めて強く感じ、自覚しました。住民の方とお話しする機会があるたびに、行政職員であるという自分の立場や、行うことのできる範囲の限界を思い知ります。ときには、寄せられた要望に対して、苦しい回答をせざるをえないときもあり、住民の方から厳しい言葉をいただくこともあります。しかし、その言葉を受け取ることから、県民の生活の基盤を支える業務に自分が携わっているという責任感も強く感じました。そして、限られた範囲であっても、その中で自分ができる最大限の結果をあげられるようになりたいと思いました。

入庁して半年以上が経ち、自分の立場や役割、やるべきことを少しずつ理解してきた中で、わかったことがあります。それは、自分の担う仕事には、ゴールが存在していたり、ここまでしたらクリアであるということは決してなく、日々変化していく状況に対応し、

常に学びの姿勢でいなければいけないということです。一人の公務員としての自覚を持つことはもちろんのこと、さらに一人の土木技術者として、臨機応変に対応できる確かな技術力を身につけることが一番必要であり、これが今の私の目標です。幼いころの自分が、安全に安心して過ごし、楽しい思い出を残せたように、今度は私が誰かの幸せな思い出を守っていけるよう、自分に任された仕事に向き合っていきたいと思います。そして、この目標を達成するためにも、今後も日々精進して、尊敬する先輩方の横に胸を張って立つことができるよう、努力していきます。